

大鳳寺跡第6次発掘調査概報

(宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第9集)



1986

宇治市教育委員会

例 言

1. 本書は、大鳳寺跡第6次発掘調査概報である。
2. 調査地の地番は、京都府宇治市菟道西中18の1・2、22の2、24番地である。
3. 発掘調査は、昭和61年2月1日より同年3月27日まで実施した。
4. 調査の組織は下記のとおりである。

調査主体者	宇治市教育委員会	
調査責任者	宇治市教育委員会教育長	岩本 昭 造
調査指導者	元近畿大学教授	杉山 信 三
	京都府教育庁文化財保護課記念物係長	中谷 雅 治
調査担当者	宇治市教育委員会社会教育課主事	杉本 宏
調査事務局	宇治市教育委員会参事	木村 光 長
	同 社会教育課長	小林 巧
	同 文化係長	吉水利 明
	同 主事	梅田 正 人
	同 主事	小西 弘 子
調査補佐員	奥田耕三・猿向敏一	
調査補助員	岸本弘司郎・佐原 耕・樋口秀一・上村和也・鐘方正樹・成清利彦 坂野喜之・元川康司	
調査整理員	古川小百合・中尾由香里・藤田訓子・野寄奈津子・堀美津代	
調査協力者	京都府教育委員会	
5. 調査にあたっては、地主である梅林弘一氏及び長谷川庄三氏に多大な協力を得た。記して感謝申しあげる。
6. 本書の編集は社会教育課が行い、杉本が担当した。

序

大鳳寺跡は、昭和46年に宇治市史編纂委員会によって最初の発掘調査が行なわれ、本市で初めて白鳳時代創建の古代寺院であることが確認され注目を集めた遺跡であります。

本市では、昭和57年度から国・府より補助金の交付を受け、寺域の範囲確認調査を進めているところであります。昭和60年度はその4年目にあたり、昨年度に調査し確認した金堂跡東側に塔跡を予想して調査を実施しました。調査の結果は、当初予想した塔跡を確認することはできませんでしたが、石積状遺構等の大鳳寺終焉後の土地利用をうかがう資料を得ることができました。次年度も引き続き解明に努めたいと考えております。

最後になりましたが、調査を快諾していただきました地主の方を始め、調査にあたり種々ご指導をいただきました各位、調査に従事していただきました方々に心よりお礼申し上げます。

昭和61年3月

宇治市教育委員会

教育長 岩 本 昭 造

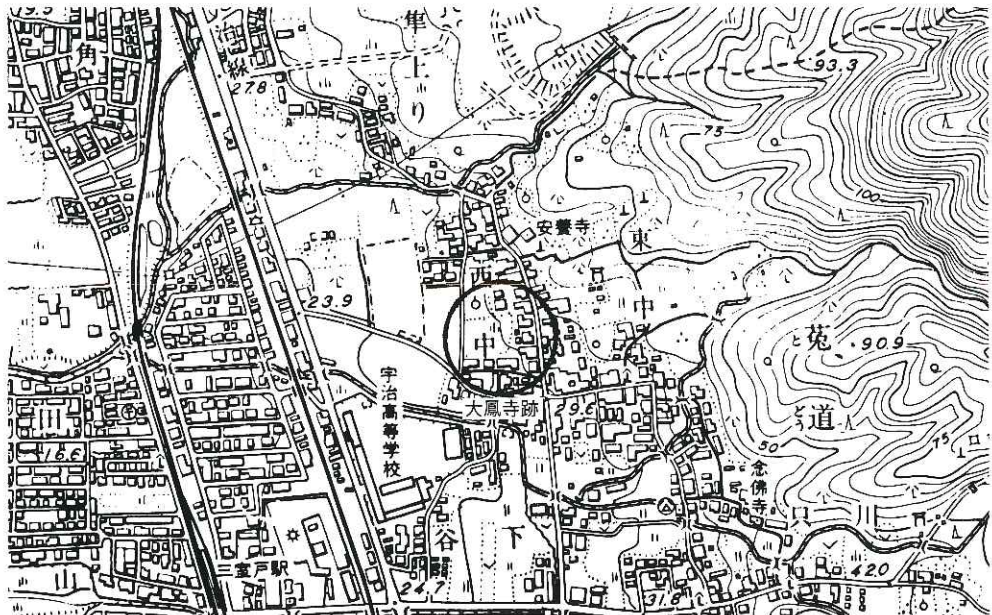
1. はじめに

大鳳寺跡は、宇治市菟道西中一帯に広がる寺跡であり、宇治市東部の代表的白鳳時代寺院である。

当寺跡の発掘調査は、昭和46年の宇治市史編纂に伴うものを第1次とし、現在に至るまで通算6次にわたっており、寺の規模・内容等についても徐々に明確となって来ている。特に昭和57年度の第3次調査からは、本市教育委員会が主体となって発掘調査を年次的に実施してきており、本年はその4年目にあたる。

このような過去の調査の中で寺の規模等を考えるうえで大きな成果を得たのは、昭和58年の第4次調査と昭和59年の第5次調査である。第4次調査では、寺域の北を限る施設と思われる副2m程の東西溝を確認し、初めて寺域追究の手懸りを得ることができた。また、第5次調査では第1次調査でその存在を確認していた瓦積基壇が金堂であることを確認し、伽藍中枢部がこのあたりに存在する確証を得、ようやく寺院の内容把握に大きな一歩を踏み出すことができたのである。

今回の第6次調査は、金堂跡東側部分を中心に塔跡の存在を確かめるための発掘調査を実施するとともに、周辺地形の測量を併行して行なった。現地において掘削を開始したのは昭和61年2月1日であり、埋め戻しを終了したのは3月26日である。



調査地位置図 (1:25000)

2. 調査の経過

今回の調査では、金堂東側に第1トレンチから第5トレンチを設け塔の存在を確認するとともに、金堂西側の素掘り溝の断面精査（第6トレンチ）により廻廊等の施設を検出することを目的とし調査を開始した。

塔を確認するため、金堂の東側にトレンチを重点的に設けたのは、金堂基壇の高まりが基壇東辺を過ぎてもお東へ続いている現状の地形より金堂の右側に塔を持つ法起寺式伽藍配置の可能性を考えたからである。

調査は、まず周辺の測量とともに第1トレンチから第3トレンチの掘削を行なった。掘削はすべて人力によることとした。この3本のトレンチで塔の存在を窺わせる状況が確認できないと判断した時点で、第1トレンチ東側の畑地内で第4トレンチと第5トレンチを樹木及び耕作物を避けながら設定し掘削を行なった。第4・5トレンチではトレンチ西端で石組状遺構を検出したものの、土層の状況からはこれが中世以前にはさかのぼり得ないと考えられ、さらに下層の調査を実施したが、塔の存在を思わせる遺構は検出できなかった。また、第6トレンチにおける土層観察においても明確な遺構は確認できないため、写真及び図面等の作成にとりかかり、その終了後埋め戻しを行なった。



調査前の状況

3. 調査の概要

今回の調査では、当初予想した塔跡についてはその存在の確証を得ることができず、伽藍配置について再考しなければならない結果となった。以下、各トレンチの状況を概説する。

(第1トレンチ) 南北2.5m、東西1.5mのトレンチ。現地表下1.3m程のところまで近世遺物を包含する層が続いており、寺院等に関する遺構は検出されなかった。

(第2トレンチ) 第1トレンチ南側に設けた、南北2.5m、東西1.5mのトレンチ。現地表下1.3m程まで近世遺物を含む層が続いており、状況的には第1トレンチと似る。

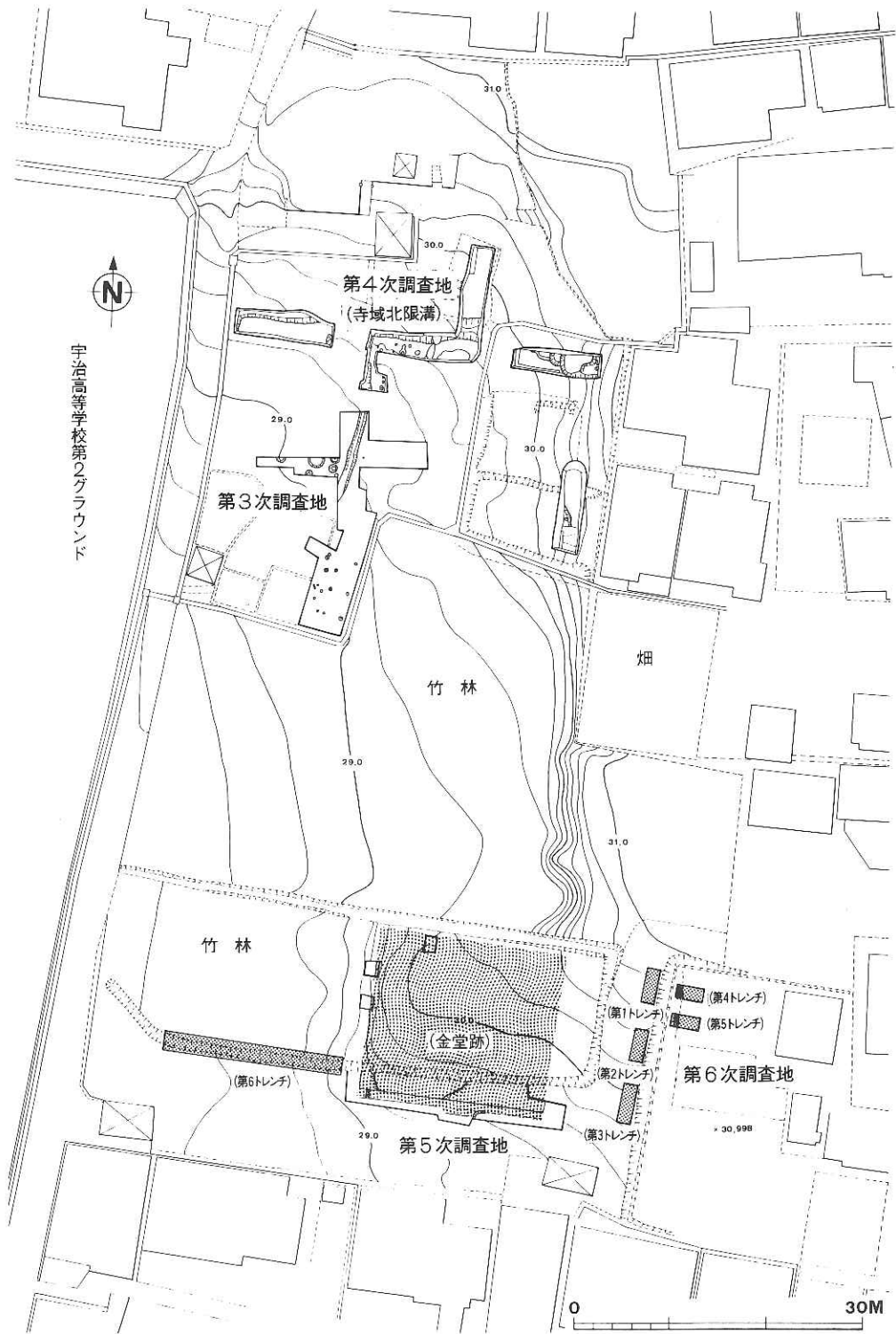
(第3トレンチ) 第2トレンチ南側に設けた、南北3.5m、東西1.5mのトレンチ。現地表下1m程のところ、暗褐色の整地層を確認した。この土層は、トレンチ西側にある金堂跡に続くものであり、大鳳寺造営時の整地層である。高さ的には金堂基壇下端とほぼ等しい。また、この土層直上には焼土層が認められた。この焼土層は昨年調査においても金堂基壇上の東半部で検出されている。時期的には近世初頭頃と思われる。

(第4トレンチ) 第1トレンチ東側に設けた、南北1m、東西2.5mのトレンチ。現地表下1m程のところ、比較的安定した淡褐色土層を確認した。この層中には遺物は含まれないが、状況的には人為的な盛土と考えられる。第3トレンチで検出した整地層より高さ的には0.5m程上方にある。しかし、本層を塔に係わる基壇上とするには若干軟らかく、今回の調査ではその性格について確定することはできなかった。また、トレンチ西端部で淡褐色土を切り込んだ石垣状の遺構を検出した。高さは0.4m程。自然石を乱積状に積んだものである。層位的には近世頃のものである。

(第5トレンチ) 第4トレンチ南側に設けた、南北1m、東西3mのトレンチ。状況は第4トレンチと類似する。ただ、トレンチ西端で検出した石垣状の遺構は、第4トレンチほど高くなく、わずかに小礫が2～3段分ぐらいかたまっていたにすぎない。

(第6トレンチ) 金堂を東西に縦貫する現代の素掘り溝の金堂より西側部分の土層断面を精査し観察したが、明確な遺構は認められなかった。

このように、今回の調査目的の主眼であった塔跡の確認については、結果としてできていない。ただ、第4・5トレンチで確認した淡褐色土の性格については、なお不明な点が多く今後の調査課題となろう。また、第1・2トレンチの状況と第4・5トレンチで確認した石垣状遺構は一体となって近世頃の土拡となる可能性が高い。遺物については、今度の調査ではほとんどが近世のものであり、大鳳寺にかかわるものは稀れである。



調査地周辺地形図



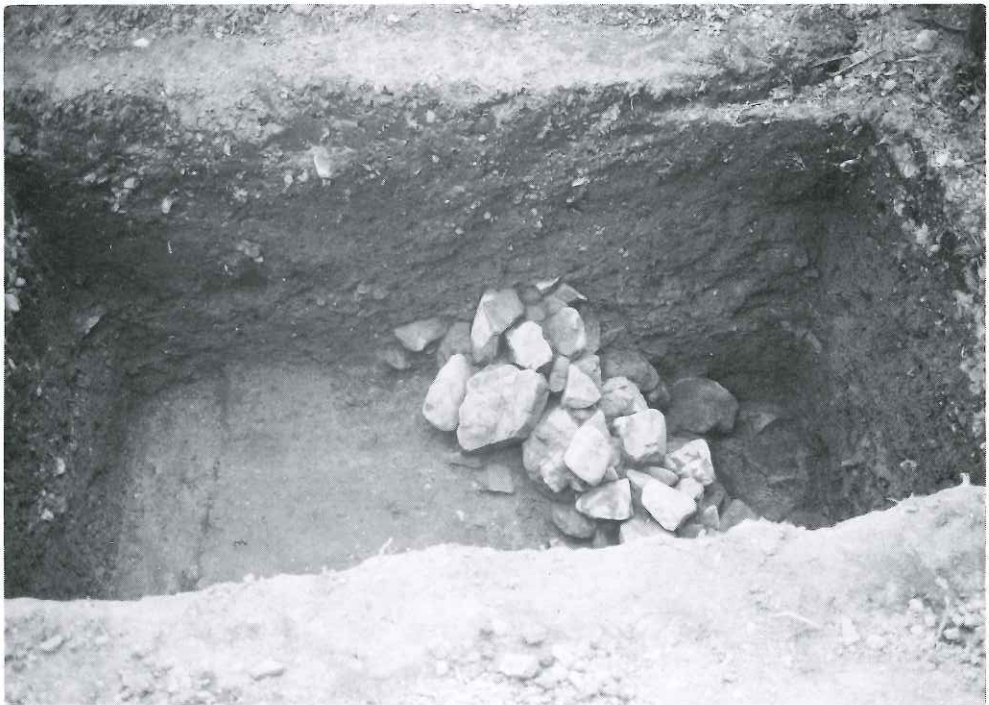
金堂瓦積基壇（昭和59年、西より）



第5トレンチの状況（東から）



第4トレンチの状況（東から）



第4トレンチの状況（北から）

4. ま と め

大鳳寺跡については、過去の調査により出土した瓦の検討から白鳳時代に創建され、奈良時代・平安時代に改修され、おおむね平安時代後半に廃絶したと考えられている。このような白鳳時代寺院については、通常「塔」と「金堂」を備えることを基本としており、他の南山城地域の寺院についてもしかりである。今回の調査は、前回確認した金堂の東側に塔の存在を現地形の状況より推測して実施したが、その結果は前述してきたとおりであった。しかし、今回の調査において、なおそこに塔が無かったとは言い切れない状況もあり、今後の調査にその課題をゆだねたい。

年代	大鳳寺出土の軒瓦・鬼瓦	時期	備考
674 (川原寺創建)		I 期	創建 (川原寺式)
710 (平城京遷都) 745 (平城京遷都)		II 期	改修 (平城宮式)
794 (平安京遷都)		III 期	改修 (平安宮式等)

大鳳寺軒瓦等編年図

[注]

- (1) 『宇治市史』第1巻、昭和48年。
- (2) 杉本宏『大鳳寺跡第4次発掘調査概報』、宇治市教育委員会、昭和59年。
- (3) 杉本宏『大鳳寺跡第5次発掘調査概報』、宇治市教育委員会、昭和60年。

昭和61年3月31日 発行

大鳳寺跡第6次発掘調査概報
(宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第9集)

(発行) 宇治市教育委員会
京都府宇治市宇治麩碓45番地

(編集) 宇治市教育委員会
社会教育課

(印刷) 株式会社 成 文 社

